学 位 論 文 内 容 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	石井　友美【論文博士】 【比較社会文化学専攻　平成20年度生】 （平成26年3月31日単位修得退学 ）	本研究は、現代中国語におけるいくつかの副詞を取り上げ、異なるタイプの疑問文、アスペクトを表す表現、モーダルを表す表現との共起状況から、副詞の意味及びそれらの表現の差異を明らかにしている。 第１章で研究の意義、範囲が述べられた後、第２章では、“只(～だけ)”、“也(～も)”、“都(すべて)”などの意味指向副詞が取り上げられ、疑問文のタイプによってこれらの副詞との共起状況が異なることが指摘された。即ち、中国語には、終助詞を使う疑問文（“吗”疑問文）と動詞の肯定形と否定形を並列する疑問文（正反疑問文）があるが、前者のみ意味指向副詞と共起でき、後者はできない。この違いは、前者では疑問の焦点の位置が自由であるため、焦点を意味的に指向する副詞との共起が可能だが、後者では、疑問の焦点が動詞に固定されるため、共起が不可能になると説明された。第３章では、完了や暫時を表すアスペクト副詞を取り上げ、将然のアスペクトを表す表現“就要……了(すぐに～になる)”と“快要……了(まもなく～になる)”の違いを明らかにした。即ち、前者は完了のアスペクト副詞と共起するが、後者は暫時のアスペクト副詞と共起する。これは、それぞれのアスペクト構造上の注視点が異なり、前者は終点に注視点を置くが、後者は動作の速度に注視点を置き、その注視点と一致するアスペクト副詞をそれぞれ選択するためであると説明した。第４章では、感情のモダリティを表す副詞を取り上げ、それらが意志を表す助動詞“愿望(どちらかというと～したい)”と“想(～したい)”の違いを明らかにすることを述べた。これらの助動詞には、感情のモダリティを表す副詞が後者とのみ共起し、前者と共起しないという違いがある。この違いは、前者は選択性の意志を表すのに対し、後者は未定の意志を表し、後者のみが感情のモダリティを許す余地を持つからであると説明した。第５章では、第２章～第４章の研究をまとめ、今後の展望を述べている。 結論として、副詞は虚詞、即ち文法的な機能を担う語であるため、焦点、アスペクト、モーダルなどの文法的な機能を担う表現との共起制限が観察されることが述べられ、副詞の持つ多様性をの一端を示すものであると述べている。
論 文 題 目	現代中国語における副詞の共起制限－焦点、アスペクト、モダリティの関連を通して	
審 査 委 員	（主査）　准教授　伊藤　さとみ	
	教授　伊藤　美重子	
	教授　宮尾　正樹	
	教授　和田　英信	
	准教授　中西　公子	